

[市民公開講座 I]

どしょうまち
道修町の今昔

深澤 恒夫

くすりの道修町資料館 館長

はじめに

道修町は、豊臣秀吉が大坂城の城下町を作った頃、船場の一郭に形成され始めたものと考えられている。天正16年(1588)に町家20軒を焼失したという火事の記録の中に、「道修町」の名が記載されている。

豊臣時代、北船場の地域は長崎からの輸入品を扱う貿易商の町であった。中国から輸入される唐薬種(漢薬)を商う人たちが、次第に東横堀の平野橋辺りから北側の道修町へ移っていったと考えられている。その契機は、寛永年間(1624~1644)に堺の商人である小西吉右衛門が、道修町一丁目に薬種屋を開いたとされている。

道修町が、現在のように「くすりの町」として知られるようになったのは、八代将軍徳川吉宗の享保7年(1722)以降のこと。道修町薬種中買仲間124軒が幕府から“株仲間”として公認された。株仲間は、諸薬種を吟味(検査)のうえ適正価格を付けて、独占的に全国に供給するようになってからのことである。

明治に入ってから西洋薬が主流となったが、当初は神戸・横浜の外国商館からの輸入であって、明治中期には欧米からの直輸入が始まった。

一方、道修町薬種商たちは共同の薬品試験所の設置や、製薬事業にも着手し始め、その多くは薬種問屋から製薬企業へと発展していった。今では薬のみならず医療、健康関連産業の分野にも進出して、さらに躍進を続けている。現在、製薬業界はグローバル化で国際競争のまっただなかであるが、今回「温故知新」をキーワードに薬の町「道修町」の400年をひもといてみる。

I. 道修町のはじまり

- ・ 船場：豊臣時代は「船着場」であった。
- ・ 道修町：当時は「道修谷」と呼ばれる谷であった。
- ・ 豊臣秀吉が大坂城の城下町を作った頃、北船場の地域は長崎からの輸入品を扱う貿易商の町であったが、中国から輸入される唐薬種(漢方薬)を商う商人が、次第に東横堀から道修町へ

II. 江戸時代の薬種中買仲間^{やくしゅなかいなま}

1. 道修町と薬種商

- ・ 江戸時代の二代将軍徳川秀忠ときに堺の商人「小西吉右衛門」が道修町一丁目に「薬種商」を開いたのが始まり。
- ・ 道修町が「くすりの町」として有名になったのは?

八代将軍徳川吉宗の享保7年(1722)「享保の改革」以降。

これまでの中国の「唐薬」にかわる「和薬」を奨励した。

江戸で「小石川御薬園」と「小石川養生所」を開設。

関西では、享保14年(1729)奈良県大宇陀町の「森野旧薬園」開設。

「和薬」の改め役(検査担当)である道修町薬種中買仲間124軒「株仲間」として幕府より公認さ

れてから今年で293年。

2. 道修町は全国の薬種流通の中心地

- ・長崎で輸入した「唐薬種」、各地から集まった「和薬種」の目方を改め、品質を鑑別し、価格を決定して諸国に売り捌いた。江戸時代の大坂は、物流・経済の中心地。
- ・長崎で輸入された唐薬種を落札する「五ヶ所商人」と大坂に送られた唐薬を荷受けする「唐薬問屋」、その唐薬を鑑別・値決めして本商人から買取る「道修町薬種中買仲間」の三者間で商売が円滑にするための協定書「三方申合條目」作成。

Ⅲ. 薬種問屋から製薬企業へ（明治期）

1. 漢方医学から西洋医学へ

江戸時代の草根本皮を原料とする漢方医学から明治政府は漢方薬から化学薬品を扱う西洋医学（ドイツ医学）の時代へ

- ・化学・洋薬の知識＝化学博士ハラタマ（オランダ人）
- ・薬学（司薬場）＝薬学博士ドワルス（オランダ人）
- ・明治19年 薬品取締制度「日本薬局方」第一版公布される。

2. 大阪製薬から大日本製薬へ

「日本薬局方」に適合する薬品を製造するのは個人では無理であったため大阪の「大阪製薬株式会社」と東京の半官半民「大日本製薬会社」が合併して「大日本製薬株式会社」設立して「局方」の薬品製造を行った。

3. 大阪（道修町）における薬学校



Ⅳ. 薬種問屋から製薬企業へ（大正期）

大正3年（1914）に第一次世界大戦が始まり、我が国の医薬品はその殆どをドイツからの輸入に依存していたため、品不足と価格の高騰を招いた。

政府は医薬品の国産品による自給自足体制を進めた、翌年に「染料医薬品製造奨励法」を公布し、これに刺激されて国内製薬工業が急速に成長した。

Ⅴ. 戦時統制経済下での医薬品業界（昭和前期）

- ・昭和6年（1931）満州事変、昭和12年日中戦争が勃発により、統制経済が強化され「医薬品生産・配給統制規則」が実施された。
- ・昭和18年（1943）会社の本質を、社名によって明確にすることが要請され、医薬品業界でも従来の〇〇商店→〇〇製薬会社、〇〇薬品工業会社に社名が改称された。
 - 田邊屋五兵衛商店 → 田邊製薬株式会社
 - 伏見屋市兵衛商店 → 小野薬品工業株式会社
 - 近江屋長兵衛商店 → 武田薬品工業株式会社
- ・昭和18年12月から太平洋戦争に入り、軍需優先により民需は圧迫され、戦争末期には人手不足、戦

災等により医薬品の生産量は激減し、また、東南アジアに工場を展開していた医薬品業界の海外資産も、敗戦によりすべて失った。

VI. 製薬企業の戦後から現在（昭和前後～平成現在）

〈昭和20年代～30年代〉

1. 昭和20年（1945）8月終戦 → 戦後復興
2. 抗生物質の登場
アメリカ進駐軍が優れた菌株を提供わが国にペニシリンの製造を指導
3. 結核薬、その他の画期的新薬の製造（各製薬企業）
4. ビタミン剤の花形時代（各製薬企業）
5. 海外製造技術の導入（国産化へ）
「国民皆保険」制度の実施（昭和36年）

〈昭和40年代～50年代〉

1. 薬害問題の発生（睡眠剤サリドマイド、止痢薬キノホルム）
2. 「製造特許制度」から「物質特許制度」へ
3. 国産の自主開発新薬の登場
4. GMP（製造管理・品質管理基）、GLP（安全性試験の実施基準）
5. 医薬品製造業100%資本自由化（海外製薬企業との提携）
 - ・外国の画期的な新薬が、海外企業との提携で導入・販売
 - ・外資系企業の日本市場へ参入が相次ぎ、市場争奪

〈昭和60年代～平成 現在〉

1. 国際化と海外売上高の伸長（海外に対抗できる新薬開発の成否）
2. 国際的な新薬の研究開発競争へ（研究開発力の強化）
3. ジェネリック薬（後発医薬品）の登場
4. 製薬企業のグローバル化、情報化時代へ